



プルキンエ不整脈

野上昭彦・小林義典 著

B5判 頁244 2009年

定価 8,400円(本体 8,000円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00831-0]医学書院刊

驚くべきタイトルの単行本が上梓されたものである。平成21年7月に京都で開催された日本心電学会と日本不整脈学会の合同学術集会の書籍展示で、最大部数を売り上げたようである。不整脈全体を網羅するものばかりでなく、個々の不整脈を扱った単行本はこれまでに上梓されている。例えば心房細動、WPW症候群、Brugada症候群などである。これらの不整脈はそれなりにまとまった疾患として認識されており、単行本としても違和感はない。

「プルキンエ不整脈」という疾患概念はなじみがうすい。左脚後枝に起源を持つベラバミル感受性心室頻拍をまず思い浮かべるが、その他の心室性不整脈については言われてみればなるほどプルキンエ線維が関係しているものもありそうに思われる。このような古い頭に一撃を加えるほどのインパクトを本書は持っている。著者の野上昭彦先生、小林義典先生は心臓電気生理の臨床でこれまで多くの業績を挙げてこられたが、特にプルキンエ線維に関連した心室頻拍や心室細動の研究に関しては第一人者である。

本書では、第Ⅰ部としてまず馴染みの深いベラバミル感受性特発性心室頻拍から始まり、異所性心室頻拍、特発性心室細動が続き、Brugada症候群・QT延長症候群が記載されている。第Ⅱ部では、器質性心疾患に伴う心室性不整脈として脚(枝)間リエントリーや心筋梗塞、虚血性心疾患、炎症性心疾患、心筋症に伴う心室頻拍とプルキンエ線維とのかかわりがまとめられている。第Ⅲ部では、Q&A形式でプルキンエ線維にかかわる歴史や基礎的研究が紹介されている。古くは田原教授によるプルキンエ線維網の記載から近年まで、

日本人が明らかにしたさまざまな事象がまとめられていて、読み物としても楽しめる。

多くの心電図、心内電位図、CARTOマッピングのカラー図版や組織所見(カラー図版も多数あり)などが豊富に掲載されており、難解な電気生理現象も理解しやすいように工夫が凝らされている。具体的な症例が提示されており、所々欄外に参照すべきQ&Aの項目が明示されているのは、読者の便を考えた上での工夫であろう。

世界でもこのような単行本は存在しない(大江教授の推薦序文にもそのようにある)、しかもお二人の共著で記述が一貫している。いっそのこと英語で出版すればよかったのと思わなくもない(裏を返せば、日本語でこのような本を読めるのは有難いことである)。医学関係の書籍が氾濫する中であって、本書が刊行された事実には喜びたい。わが国の医学書籍出版業界も捨てたものではないと、「プルキンエ不整脈」に着目した野上先生、小林先生の慧眼に、またこのような本をあえて出版した医学書院に賛辞を贈りたい。

現在、特発性心室頻拍はアブレーションで根治できる。電気生理学をよくは知らなくてもアブレーションで頻拍が根治できれば患者さんは満足かもしれない。しかし、このような治療が可能になったのは、先人が積み重ねてきた知識があった上でのことである。本書を、不整脈を専門とする方々に、ことにアブレーションに携わる若い諸君に、推薦したい。目から鱗が落ちる思いをするであろう。また本書の中で、詳細は不明である、今後の検討が必要であるとされた事項に、若い諸君はチャレンジしてみてはいかが？